

外科說約

石黑忠惠纂述

九

Vol 9 + Vol 19

2 Vols

350

外科說約卷之十九

石黑忠惠 纂述

卷之十八ニ於テ外科說約四套全ク終リ略ボ
外科ノ綱要ヲ說了レリト雖モ恨ラクハ齒牙
ノ一科ヲ缺ケリ故ニ英國ノ大家ドロイト氏
ノ外科書ヨリ齒牙病篇ヲ摘取シテ爰ニ出シ
以テ其缺ヲ補フ覽者幸ニ順序ノ不齊ナルヲ
尤ムルヲ勿レ

齒牙病論



其一 齒齦截開術

嬰兒ノ齦肉炎腫シテ其質鬆軟トナリ或ハ齒牙
生セントシテ出難キノ徴ヲ見バ直ニ小刀ニテ
之ヲ截開シ血ヲ瀉スヘシ又齒頭直ニ粘膜下ニ
至リ著シク指頭ニ觸ル、其ハ齒ニ沿フテ深ク
截割シテ齒頭ヲ全ク露出セシムヘシ此二術共
ニ皆銳利ナル細尖刀ヲ用ヒ横ニ刺入シテ刀背
齒頭ニ觸ル、ニ至リ外ニ向テ割破スルヲ法ト
ス

其二 永齒亂生

此症ノ原因ハ齶骨狹小或ハ其異形ニ在ルナリ
犬齒或ハ前齒甚シク前ニ突出スル者ハ其上下
ニ拘ラズ何レモ患兒ニ諭シテ常ニ自ラ指ヲ以
テ之ヲ押壓シ自然ノ位置ニ就カシムヘシ若シ
此法ヲ施シテ患者十四五歳ニ至ルモ尚^ホ効ナク
齒牙交錯シ緊シク逼壓スル者ハ之ヲ拔除スヘ
シ又小白齒中ノ一個ヲ拔テ餘地ヲ設ル^ルハ却
テ之ニ優ル^ルアリ○兒童ニ於テ其口ヲ閉ツル
^ル下齶ノ前齒上齒ヨリ前ニ突出シ或ハ正シク
相對シテ下齒ノ尖頭上齒ノ後ニ納ラサル^ルア

リ此症ニハ患者ヲシテ自ラ舌尖或ハ指頭ニテ
平常上齒ヲ前方ニ押靡セシムヘシ又或ハ食匙
ノ柄端ヲ上齒ノ後際ニ插ミ口ヲ噤閉シ旁ラ匙
柄ヲ挺杆トシ上齒ヲ前押シ兼テ下齒ヲ後ニ押
スヘシ如此スルヲ日々怠ルナケレハ遂ニ整然
タル位置ヲ得ルナリ然レモ此簡易ノ法方皆効
ナキ時ハ宜シク齒科専門ノ人ニ就テ治ヲ乞フ
ヘシ

成齒殊ニ下齶ニ生スル者ハ甚タ亂生シ易クシ
テ或ハ横ニ外若クハ内ニ向テ突出シ以テ頬肉。

舌舐ヲ刺衝シ潰瘍ヲ生シ又ハ前方ニ隣接セル
臼齒ニ向テ突衝シ或ハ後方下齶骨ノ冠狀突起
ヲ衝キ甚シキハ骨質中ニ穿入シテ骨腫ヲ生シ
其中ニ埋没スルヲアリ但シ上下齶骨ノ腫瘍ハ
他ノ齒牙ノ發生異常ナルニ由テ亦往々之ヲ發
スルヲアリ

其三齒牙破折及脫出

齒牙ノ一部破折シテ尚ホ齒瓢管ニ及ハサル者
ハ單ニ鑢ヤスリヲ以テ破片ノ稜角ヲ圓滑ナラシムレ
ハ後害ヲ殘スヲナシ然レモ齒頸全斷シテ瓢管

露出シ随テ疼痛甚シキ者ハ先ツ硝酸銀ヲ以テ
瓢肉ヲ焦灼シ數冷水ニテ含漱セシメ疼痛减退
シ瓢肉稍固キニ至リ假齒ヲ作りテ斷齒ノ根株
ニ接合セシム然レハ續發ノ炎症ニ由テ齒根疎
解スル者ハ速カニ拔除レテ可ナリ○又衝突等
ノ為ニ唯齒根疎解スルノミニテ破折セザルヲ
屢之アリ此症ニ於テハ細キ絹糸ヲ用テ之ヲ隣
齒ニ繫着固定スルノミニテ足レリ但シ齒牙全
ク脱出スルハ其出血止ムヤ否ヤ直ニ之ヲ舊
槽内ニ納メ絹糸ニテ隣齒ニ繫着シ一切咀嚼ヲ

禁レ且兼テ齒齲ヨリ漏血シ以テ炎症ヲ防クヘ

其四齲齒

齒牙ノ表面軟化壞爛ヲ漸々侵蝕シ遂ニ齲齒管

ニ及ヒ以テ劇甚ノ齒痛ヲ發スル者之ヲ齲齒原

齲齒ノ義ト名ツク蓋シ此症ハ齒牙ノ骨質及ヒ珐

瑯質ノ發生不全ナルニ因ル者ニシテ殊ニ腺病

家及ヒ榮養不給ノ者ニ多シ且都テ全身ノ健康

ヲ害スル諸件ハ皆之ヲ増惡ヤシムル者ナリ乃

チ妊娠及ヒ授乳ニ由テ往々此症ヲ發シ又體力

虚脱汞劑誤用等ノ如キ峻惡ナル疾病ニ續發ス
ルアリ蓋シ齧齒ハ單ニ瑱瑯質ノ破碎スルニ
由テノミ特發スル者ニ非スノ勞瘵或ハ腺病等
ノ如キ全身病ニ起因スル者ナリ

療法

齧齒ノ敗壞スル部ヲ盡ク刮去シ後黃金
或ハ銀膏若クハギユツクペルシヤト珪土トヲ
捏和スル者ヲ以テ孔内ヲ充填スヘシ然レトモ
敗壞深ク侵淫シテ齒齶管ニ及フ者ハ豫メ先ツ
齶肉ノ潰壞ヲ治シテ自ラ骨質ヲ化生シ以テ之
ヲ蓋護スルヲ得セシムヘシ或ハ又其腐敗性

ノ分泌ヲ遏止スルノ所置ヲ施スニ要アリ決メ
下際齙肉ノ分泌未タ止マサル時夙ク之ヲ充填
スルヲ勿レ乃チ此法ハガレヲソートヲ以テ綿
絮ノ小球ニ醺シテ之ヲ齙齙管内ニ入レ更ニ乳
香假漆フニスヲ浸シタル一片ノ綿ヲ以テ其上ヲ蓋フ
ヲ良トス而シテ二三日毎ニ之ヲ交換シテ排泄
全ク遏ムニ至ルヘシ然レモ若シ齙肉ノ知覺過
敏柔軟脆弱出血止マサル者ハ硝酸銀ノ一小片
若クハ少許ノ砒石ヲ孔内ニ入レ以テ齙肉ヲ灼
滅センヲ要ス按外痛楚ナキ者ナリ斯シテ後更ニケレ

ヲソート綿ヲ用フル前法、如クニ排泄止ム
ニ至レバ少許ノギユツタペルシヤニ硅土ヲ涅
和スル者ヲ以テ孔ヲ充填シ兼テ齧肉ノ側面ヨ
リ細孔ヲ錐レテ蕪竈管内ニ通スヘシ斯ノ如ク
スルハ爾後排泄全ク止マサルモ絶ヘス此孔
ヨリ流出スルカ故ニ假令蕪肉廢滅スルモ此蕪
ハ尚ホ數年間咀嚼ノ用ニ適スルナリ

小兒ノ諸病ニ於テハ其乳蕪ノ齧齧症ニ注目シ
テ之ヲ所置スルハ自ラ其病苦ヲ免レシムル
ヲ屢之アリ乃チ少許ノ假添按ニ乳香ヲ醺レタ
假添ヲ云

ル綿絮ヲ以テ其孔ヲ塞キ食物ノ抵觸ヲ防クヘ
シ

乳齒ハ假令齲齒症ニ罹ルモ之ヲ拔除スル由ハ
之カ為メニ齲骨狹小トナリ後來永齒ノ發生ニ
方リテ其互ニ緊迫スルノ恐アリ故ニ乳齒ハ拔
クコトヲ禁スト然レモト一ノ氏ハコレ全ク無根
ノ妄説ニシテ毫モ恐ルハニ足ラスト云ヘリ故
ニ病齒ト雖モ猥リニ拔除スルコトナク若シ痛楚
甚シキカ或ハ齲肉炎腫スル者若クハ飲食ノ際
食物齒頭ニ觸レテ痛ノ發スルカ為ニ其児咀嚙

ヲ欲ヒスレテ完嚙スルヲアラハ速ニ之ヲ拔除
スルモ妨ナシ

都テ齒牙ノ壞敗速カニ増進スルモノハ内服藥
就中殊ニ肝油鈹劑等ヲ與フヘシ

其五 齒痛

齒痛ニ數種アルヲ左ノ如シ

其二 齦肉炎 齒牙破傷シテ齦肉曝露スルハ

食物直ニ之ヲ壓迫シ或ハ冷熱苦クハ酸味ノ飲

食ニ由テ動モスレハ齦肉損傷シ又冒感攝生不

良及ヒ都テ全身ノ健康ヲ害スル諸件ニ由テ炎

症ヲ發シ易シ其症候ハ劇痛忍ヒ難ク齒質非常
ニ脆弱トナリ齒槽中ノ軟部ニ於テ炎症性滲潤ヲ
起シ為ノニ齒牙疎脱シ骨膜及ヒ齦肉炎症腫シテ
遂ニ齒槽内外ニ膿腫ヲ發ス

療法

咀嚼ノ用ニ堪ヘサルモノハ速ニ之ヲ拔
除スヘシ然レモ稍用ユヘキモノハ先ツ孔内ノ
異物ヲ除去シ次ニケレヲソレト用フルヲ已
ニ前條ニ説クカ如クスヘシ患者熱症ヲ兼子舌
苔汗穢ナル者ニハ甘汞コロシント等ノ下劑ヲ
内服セシメ肉羹汁ヲ與ヘ溫蒸劑ヲ施シ溫湯一

大蓋ニ重炭酸曹達一茶匙ヲ和シ以テ數回含漱
スルニ宜シ其他瀉血ヲ施シ或ハ小刀ヲ以テ病
齒ノ西側ニ於テ深ク齦肉ヲ截割ノ骨面ニ至リ
又依的兒ト單寧^イコロ、ホルムト龍腦硝酸依的
兒ト明礬ノ溶液ヲ含漱劑トナシ及ヒ必列篤里
根ヲ咀嚼セシムル等皆之ヲ試ムヘシ

其二齦肉知覺過敏 病齒ト隣齒トノ間ニ於テ
齦肉鬆軟海綿狀ヲナシ腫脹シテ非常ニ知覺過
敏トナリ疼痛シ若シ食物誤テ此ニ觸ル、或ハ
非常ノ劇痛ヲ發ス此症ヲ治スルニハ深ク齦肉

ヲ截割シ單寧ノ含漱劑必列篤里根ノ咀嚼劑及
ニ緩下劑等大ニ効アリ

其三、神經痛　神經性齒痛ハ其齒牙ノ健全ナル
ト其己ニ少シク齧齒症ニ惟ルトニ論ナク卒然
發作シテ後忽チ退キ其間歇時多ク整齊ナルヲ
以テ之カ徴トナスヘシ乃チ婦人妊娠ノ初期ニ
於テハ大概此症ヲ發シ又虛弱家モ往々之ニ罹
リ易シ

療法

大量ノ規屋ヲ與ヘ且緩下劑及ヒ變質劑
ヲ兼用シテ良効アリ

其四 僂麻質私性齒痛

此症ニ於テハ疼痛齶骨

ニ始リ蔓延シテ齒牙ニ及ホシ諸齒交モ疼痛シ

之ヲ拔除スルモ更ニ寸効ナク唯青汞丸或ハ下

劑必量ノコルシキユムヲ兼用シ次テ塩酸安母

尼亜半ヲ宛四分時毎ニ之ヲ與ヘ或ハ沃陣加留

母ニ幾那劑ヲ伍用シテ効アリ

其五 右ニ舉クル諸症ニ由テ間、齒牙中ニ過多ノ

骨質ヲ澱着シ以テ齒牙増大スルモノアリ此症

ハ時トシテハ健全無恙ノ齒ニ發スルヲアレハ

大概齶齒或ハ破折スル者ニ於ケルヲ常トス即

チ齒リ長ト脆弱トナリ頑固ノ疼痛ヲ發ス
蓋レ此症、發スル劇痛ハ特ニ拔去ヲ以テ救フ
ノ外又他策ナシ

其六齒牙壞疽

齒牙壞疽ニ罹ルヤ穢黒ニ變シ踈鮮シテ齒槽
適セサルニ至ル其原壓迫或ハ齦肉炎又ハ齦
ノ誤用ニ因テ發スル者ナリ蓋シ此症ニ由テ近
傍ノ組織發炎シ患害ヲ起スモノハ速ニ之ヲ拔
去スルヲ要ス

其七拔齒法

凡ソ人身ノ疾苦ヲ救治セント欲スル者ハ假令
瑣々タル小技ト雖モ豈之ヲ忽ニス可ンヤ是ヲ
以テ苟モ良醫タル者ハ此拔齒術ヲ能セサル者
ナレ蓋シ拔齒ノ術タル甚タ簡易ナリ器具ヲ備
ヘ且以シク心ヲ用フルハ容易ク之ヲ行フヲ
得可シ然レモ亦其技倆ニ巧ミナラサルハ往
々不測ノ災害ヲ招クナキニ非ス故ニ先ニ豫メ
器械ノ造構ヲ詳カニシ且屍骸ニ就テ其運用ヲ
習熟シ以テ始メテ之ヲ活骸ニ及ホス可キヲ他
ノ手術ト異ナラス即チ此ニ用フル所ノ器械ハ

鉗子、鑷子及ニ齒鍵是ナリ

其二、鉗子ハ方今齒科ニ於テ專ラ用フル具ナリ
其嘴端尖銳ニシテ深ク齧肉ト齒頸トノ間ニ入
リ以テ齒槽縁ノ接際ニ於テ之ヲ固拮スルヲ要
ス故ニ兩嘴微シク内方ニ彎曲シ柄端ヲ握ルル
ハ嘴端自ラ齒上ニ滑利シテ其頸ヲ固拮スルノ
形ヲナス鉗子ノ嘴端ハ凸凹ヲナシ各齒ノ形狀
ニ隨テ恰好之ニ適合スヘシ是ヲ以テ醫家宜シ
ク七種ノ鉗子ヲ備フヘシ即チ其第一第二十三
九圖ニ示スモノハ左側ノ上臼齒其二第二十三

十圖ニ示スハ右側ノ上臼齒ニ用フ蓋シ此上臼
齒ノ形狀ハ一種他ト異ナレハナリ其三第二百
三十一圖ニ示スモノハ左右ノ下臼齒ニ通用ス
其四第二百三十二圖ニ示スモノハ上犬齒齧齒其
五第二百三十三圖ニ示スモノハ下犬齒齧齒ニ
用フ其他上齧ノ斷齒根ヲ拮去スルニハ第二百
三十四圖又下齧ニ於テハ第二百三十五圖ノ鉗
子ヲ要ス即チ以上圖スル所ノ鉗子ハトメス
氏ノ發明スル所ナリ
鉗子ヲ用ヒテ齒ヲ抜クニハ第二百三十七圖第

二百三十八圖ノ式ニ法ルヘシ而シテ二。設ノ手
術アリ即チ一ハ齒根ヲ疎解セシムニハ之ヲ正
直ニ拔去スルナリ上齶ノ齦齒或ハ犬齒ヲ拔去
スルニハ先ツ之ヲ固拮シテ緩ニ轉戾シ兼テ輕
ク之ヲ動揺シテ其根ヲ緩ノ微シク後方ニ押シ
テ直チニ牽下スヘシ又下齶ニ於テハ之ヲ固拮
シ前後ニ向テ輕ク動揺シ齒根疎解スルニ至レ
ハ直上一牽テ之ヲ拔クヘシニ尖齒及ヒ臼齒ハ
齒槽突起ヲ破壞セサルカ為メニ之ヲ兩側按一
ニ對スルニハ方ノ對スルニハ之ヲ動揺シ疎解スルヲ冀テ上或ハ

外科
卷之四

土

二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

下ニ牽キ拔去ルヘシ但シ術者宜シク鉗柄ヲ固
握シテ鉗子ノ運轉始終其拳ト共ニスヘシ然レ
凡亦其力強キニ過ルキハ齒牙ヲ破碎スルノ恐
アリ宜シク注意スヘシ

其二 撬籠

此具ハ折齒ノ根株及ヒ老人ノ齧齒

ヲ拔除スルニ於テ甚ク便ナリ乃チ其尖端ノ深
ク齒根ト槽縁トノ間ニ刺入シ次ニ籠ヲ押シテ
水平ノラシメ齒槽縁隣齒或ハ術者ノ指ヲ以テ
其支点トナシテ齒根ヲ撬擧スルナリ

其三 齒鍵

是第二百三十六圖ニ示スモノナリ

往時頗リ之ヲ用ヒテ二犬齒及ヒ臼齒ヲ拔除
セシ具ナリ然レ氏此具ハ鉗子ニ比スレハ痛甚
ク強烈ナリ且其使用拙劣ナル時ハ齦肉ヲ壞爛
シ齒槽ヲ碎破シ或ハ齦肉ヲ剝離シテ永ク患ノ
殘スニアリ或ハ鍵ノ爪鉤齦齒ヨリ滑脱シ誤テ
健全ナル齒ヲ拔去スルニアリ然レハ是等ハ蓋
シ粗拙ノ極ニシテ論スルニ足ラス但シ器械ノ
細大適當ノ者ヲ撰ミ且支点ノ位置適宜ナルハ
ハ此過失アルトナレ例之ハ齒鍵小ニ失スルハ
ハ支点自ラ高クシテ恐クハ間齒ノ冠狀部折斷

スル一アリ又其大ニ過クルキハ支点低下シテ
凡鉤滑脱シ易ク或ハ齒槽ヲ損壞スル一大ナリ
今第二百三十六圖ニ示ス所ハ鍵ノ使用式ヲ示
ス者ニシテ斯ノ如キ時ハ多以正直ニ齒槽ヨリ拔
出シテ後之ヲ損スル一トシテ下齲ノ二尖齒及ヒ
上齲ノ臼齒ニ於テハ支点ハ齒齦ノ内面ニ在リ
下齲ノ臼齒ハ之ヲ外面ニ於テスヘシ但レベル
氏ノ説ニ據レハ上齲ノ成齒ニハ決シテ鍵ヲ用
フヘカラス何トナレハ其支点ヲ設クヘキ部ノ
骨質甚タ脆弱ニシテ動モスレハ損壞シ易ケレ

ハチリ通例鍵ヲ用フルニハ豫メ齦肉刀或ハ小
鉤ヲ以テ齦肉ト齦頸トヲ剥離スルヲ要ス

其ハ拔齒後ノ出血

術後甚シク出血シテ往々危嶮ヲ招クコトアリコ
レ或ハ齒槽ノ下底ニ在ル齒動脈ヨリレ或ハ齦
肉久シク病ム者ニ於テハ齦肉組織ヨリ出血ス
其甚シキ者ハ先ツ齒槽内ノ凝血ヲ悉ク清除シ
次ニ冷水ヲ注射シ或ハ過格魯兒鐵稀釋液ヲ綿
ニ蘸シテ填塞スヘシ又此法効ナキハ左ノ法
ヲ施スヘシ即チ文^{モリバ}孤ノ細條ヲ取リ先ツ其一端

ヲ固ク齒槽内ニ押入レテ深底ニ達セシメ順序
ニ以テ許ツ、充填シテ齒齦ト平面ヲナスニ至リ
殘餘ノ細條ヲ剪去シ厚キ壓定帕ヲ其上ニ置キ
其對齒^{病齒}_{上下ナレハ其止對スルニテ之ヲ壓住}
セシメ更ニ一條ノ繃帶ヲ用テ頤下ヨリ顙頂ヲ
過キテ繃縛スヘシ

其九齒石 一名唾石

齒石ハ津唾中ノ土分沈澱シテ齒牙ニ凝着スル
者ナリ而シテ上白齒及ヒ下齦齒ニ於テ最多ク
之ヲ生スコレ恐クハ其唾管口ニ近接スルニ由

ルトリ。齒石大ニ凝堆スルキハ齦肉發炎シテ次第ニ溶崩吸收シ遂ニ齒牙疎解スルニ至ル

療法

齒石ノ凝着ハ輕軟ナル磨齒粉再製白堊ヲ最モ佳

スト又ヒ石鹼ヲ以テ齒牙ヲ清刷スル。口ニ二三回

又常ニ齋翮ヲ以テ作りタルツヤウシ齒籤ヲ用ノル等ニ

由テ能ク之ヲ豫防スヘシ蓋シ齒刷毛ハ可及的

軟弱ニシテ緻密ナラサル者ヲ撰フヘシコレ却

テ齒間ニ竄入シ易ケレハナリ己ニ齒石凝堆ス

ル者ハ宜シク剔齒具ヲ以テ之ヲ除去スヘシ即

チ其具ノ尖頭或ハ刃ヲ齒石ノ齦肉トノ間ニ刺

入シ片々之ヲ剥離スヘシ但シ此時ハ手巾ヲ以
テ指頭ヲ包ミテ齒頭ヲ麗定シ其動搖疎解ヲ防
クヘシ又時トシテハ齒石ノ小片唾管口ヲ壅塞
シ其刺戟ニ由テ不和ノ感覺ヲ起スヲアリ然レ
氏此齒石ハ亦容易ク除去スルヲ得ルモノナリ
乳香假漆方

乳香 一ツ

再留酒精

一汚半或ハ香
水ヲ代用ス

右溶和シ之ヲ少許ノ綿絮ニ浸醃スル者ハ
一時齶齒孔ヲ栓塞スルニ妙ナリ又コバル
脂ヲ依的兒ニ溶和スル者コルロヂラン或

ハギユツタヘルシヤヲ溶解セル者等皆同

一樣ノ効アリ

依的兒製單寧丁幾方

單寧 一弓

乳香 一弓

硫酸依的兒 一弓

右混和

加龍腦格魯魯保兒母方

龍腦 一弓

格魯魯保兒母 半弓

右溶和

亞砒酸加莫兒比涅方

亞砒酸末 塩酸莫兒比涅 各等分

右二味ヲ小七頭ニテ調和ス

用法ハ綿ニテ小球ヲ作為シ齧齒ノ腐^ウ凹^ロニ
入ル大サニ適サシメ此藥末ヲ附シテ齒凹
ニ插入シ其上ヨリ蠟ヲ以テ封ス但シ亜砒
酸ノ咽中ニ入り中毒スルヲ恐レテナリ而
シテ疼痛止ムヲ候シテ擢出シ清水ニテ數
回漱カシム尤モ插入中ハ唾ヲ吐出セシメ
決シテ嚥下セシムルヲ勿レ

補遺

藥氣吸入法

咽喉并ニ氣管ノ粘膜病或ハ肺病ニ輒今ハ藥液ノ蒸氣ヲ送り直ニ患部ニ達セシムル新法ヲ賞譽ス之ヲ、インハラチラント名ツク藥汽吸入法ノ義ナリ此法ヲ行フ器械ヲ、アドミニーゼルト名ツク藥液細分器ノ義ナリ此器械數種ニレモ裝置複雜ノモノハ醫家常ニ備難レ故ニ第ニ百三十九圖ニ示スリシヤルドソン氏ノ裝置ヲ簡便ノモノトス其價モ亦タ二圓金ニ上ラズ之ヲ用フルニモ亦頗ル單簡ナリ

喉頭黏膜加答兒ニハ微温湯ヲ用ヒ尚治セサレ

ハ硝砂溶液 十ハ水乃至二 食塩溶液 十ハ水乃至二

用フ又症ニ隨テ明礬溶液 五ハ水乃至十 單寧酸溶

液 一ハ水乃至十 硝酸銀溶液 一ハ水乃至三 等ヲ撰用

ス但レ硝酸銀溶液ヲ用フル時ニハ顔面ヲ被覆

セザレバ黒色ニ變スルナリ

其他癰咳等ヲ鎮靖スルニハ酢酸莫爾非涅水分

ハ一乃至四分 阿片丁幾水 二滴乃至四 菲沃私

越吉斯水 半ハ水乃至一 等ヲ用フ又肺ニ病アリテ

已ニ化膿スル者ニハ石炭酸水 七十倍乃至百倍 又ハケ

レヲソード水ヲ用フ

器械ノ用法ハ第二百三十九圖ノ硝子壺〔イ〕ニ藥液ヲ入レ嘴先〔ロ〕ヲ患者ノ口ニ向ケ患者ヲシテ充分口ヲ開カシノ術者ゴム球〔ハ〕ヲ握テ一回ハ壓縮シ一回ハ弛緩シ一縮一弛シテ休マザレハ蒸汽間斷ナク患所ニ散布ス通常五分時乃至十分時間持續シ藥液一号乃至二号ヲ吸入セシムルヲ法トス

リステル氏防腐治創法

エジンボルフノ大家博士リステル氏近手外科

一新法ヲ發明セリ其説ニ曰諸般ノ創傷膿瘍
或ハ外科術ニ於テ不良ノ繼發症ヲ發スルハ多
ク水ト大氣トニ一障ノ有機性小細胞アリテ創
面ヨリ竄ヘスルニ起因ス故ニ刀ヲ把リ針ヲ用
ヒ身体ノ組織ヲ截開又ハ刺貫スルニハ之ヲ豫
防セスンバアラズ此豫防充分ナレハ必ズ不良
ノ繼發症ナレ此ニ用ユルニハ石炭酸ニ如クモ
ノナシト此説專ラ歐洲ニ稱譽セラレ各國ノ醫
士殊ニ軍醫ハ行テ教ヲ受ル者多シ其法譬言バ一
處膿腫又ハ血瘍ヲ截開ヤントスルモノハ六十

倍乃至百倍ノ石炭酸水ヲ製シ此ニ用ユヘキ外
科器械并ニ壓定巾撒絲繃帶ト術者ノ手ト皆之
ヲ石炭酸水ニ浸シ瘍面ニハ藥液細分器^{アドミニセル}ニテ石
炭酸水ノ蒸汽ヲ散布セシノ始終其蒸汽中ニ
截開シ膿ヲ泄スヤ否ヤ直ニ油絹ヲ石炭酸ニ蘸
シテ瘍面ヲ覆ヒ撒絲壓定巾ヲ置キ繃帶ニテ凡
四日間放置シ繃帶ヲ換フル時ニモ亦夕前法ノ
如クス其他截斷截除等ノ諸術ヲ行フニモ亦皆
ナ此法ヲ用ユ或ハ石炭酸水中ニテ施術シ患部
ヲ石炭酸水中ニ浸在ス但シ此法ニ據レバ多ク

ハ第一期癒合ヲ得繼發炎ヲ見ルヲナシ加之膿
瘍ナレハ膿量著ク減少シ惡性膿ハ著ク良性ヲ
得ル者ナリ

リステル氏ノ所說并ニ其說ニ左袒スル諸家ノ
謂フ所右ノ如シ然レ氏亦或ハ其說ヲ辯論シ此
法ニ據テ外科術ヲ行ハバ石炭酸中毒ノ諸症即
チ暗綠色ノ尿ヲ利シ咽喉ニ不快ノ灼痛ヲ覺ヘ
頭重眩暈胸痛シ脈軟弱トナリ冷汗ヲ發シ創面
ヲ弛緩シ久ク麻痺ヲ遺スト云フ然レ氏大創ニ
シテ且石炭酸水稠厚ナルモノヲ用ユルニ非レ

バ此等ノ症ヲ發スルヲナシ又或ノ説ニ據レハ
石炭酸ヲ貴スヲ多ク其價廉ナラズ故ニ高貴ノ
患者ニ施ス可クシテ一般ノ患者ニ施ス可ラズ
加之此法ニ據ラズトモ第一期癒合ヲ得ルコト
リ又此法ニ據テモ第一期癒合ヲ得ザルコトアレ
バ以テ偏信シ難シト然レモ三四年來此法大ニ
行レ令ニ至テ猶聲價高シ

創面開放療法

諸般ノ創面ハ縫接スルカ或ハ絆創膏ヲ貼シテ
以テ癒合セシムルヲ法トスルハ吾人ノ知ル所

ナリ然ルニ近時歐洲ニテハ創面ヲ接着セズシ
テ治療スル法アリ之ヲ「ラーペン」ベハンデリシ
クノ義ナリ開放治法ト名ツクト予千八百七十三年鏤行
ノ和蘭海軍醫事雜誌ニ於テ之ヲ知レ氏未ク充
分ノ疑惑ヲ存シ實地ニ試ルヲナシ近日ドクト
ル佐藤進君日耳曼ヨリ歸リ外科ニ秀名アリ一
日往テ其施術ヲ觀ルニ足部壞疽ノ患者アリ其
症候截斷ノ外治法ナシ君直チニエスマルク氏
ノ驅血帶ヲ施シ之ヲ下脚下三分ノ一ニテ環狀
ニ截斷シ其動脈ヲ結紮スルニ方テ一々結紮ヲ

剪除ス予疑テ以為ク動脈ノ結紮線ハ之ヲ創外
貼附シ後日尿管口癒着スルヲ候シテ擢出ス
ルヲ法トス今一々之ヲ結處ニテ剪去ス其故如
何ト而シテ己ニ動脈ヲ結紮シ了ルヤ創處ヲ緩
寛ニ布巾ニテ包裹シ木枕ノ上ニ安ンズリノミ
別ニ縫接縹帶セス予因テ問曰何ソ縫接ミテ創
口ヲ合セザルヤ君曰方今ラーヘンベツキ氏ビ
ルロット氏ノ諸家此ニ縫合ヲ行フヲナサズ
之ヲ自然ニ委シテ自ラ肉芽ヲ生シ四縁ヨリ皮
膚生合スルノ良善ナルニハ如ズト此法ヲ名ヅ

ケテ「ウーペンベハンデリンク」ト云フ君若シ之
ヲ疑ハバ一患者ヲ出シテ左證トセント則チ一
患者ヲ示サル是モ亦足部ノ壞疽ニシテ下脚下
三分ノ一ヨリ截斷シ截後第十三日ナリト云フ
其創口ヲ觀ルニ纜ニ撒糸ヲ以テ被フノミ而シ
テ良好ノ肉芽ヲ生シ皮膚四方ヨリ生合シ纜ニ
横徑一寸許ノ創面ヲ遺スノミ膿汁ノ排泄モ亦
實ニ僅微ナリ其他乳癌截除後ノ婦人一人ヲ示
サル是モ亦創口ヲ縫接セス唯截除シテ迹ニ撒
絲ヲ貼シ繃帶スルノミ亦善良ノ肉芽ヲ生シ皮

膚生合シ僅ニ錢大ノ創面ヲ遺ス忠惠之ヲ觀ル
ニ又ンテ積疑氷解頗ル悟ル所アリ

抑全身ノ諸部皆ナ此法ニ因ル可キニハ非ス又
歐米ノ諸家猶縫合ヲ賞譽スル人アレト書シテ
以テ後學ニ諭シ吾學愈開クレハ愈自然ニ近ク
愈進ノハ愈單純ニ歸スルノ一證トス

此章ヲ書シ了テ千八百七十四年十月鏤行ノ
和蘭海軍醫事雜誌ヲ繙閱スルニ開放治法ヲ
細論スル一篇アリ因テ之ヲ此篇ニ加ヘント
セシガ其論長クレテ一小冊ヲナス故ニ此ニ

加ヘズ之ヲ手術篇ニ加フ

撒里矢兒酸

近時新出ノ藥物ニシテ偉効確實ノ品類數種アリ就中外科ニ必要ノモノハ「コロアルヒダラー」石炭酸ヲ以テ巨擘トス而シテ此等ノ品類ハ性質効用トモニ同僚足立寛譯述ノ敏氏藥性論ニ詳ナリ唯撒里矢兒酸ニ至テハ竊モ新藥ニメ同書ニ之ノ載セズ然レモ之ヲ外科ニ用ヒテ卓効アル稱譽咭々タリ因テ米國新約克千八百七十五年七月ノ醫事新報ヨリ其說ヲ鈎出シ左ニ

録ス但シ第十七第十八兩卷ニ所謂サリシ子垂
的兒ナルモノモ亦此品類ナレ氏此酸出テ、ヨ
リ之ヲ稱譽スル人ナシ

新報編者ドクトルモルトン氏曰撒里矢涅酸ハ
蓋シ安息酸ノ酸化セレモノナラシ何ナレバ其
成分安息酸ニ酸素一和量ヲ加ハレノミナレハ
ナリ

撒里矢兒酸又ヒ其塩類ハ格魯兒鐵ノ溶液ニ遭
逢スレハ美麗ノ紫色ヲ呈ス

日耳曼ライプシフ府ノ博士フォルベ氏ハ數回經

驗ヲ積テ撒里矢兒酸ハ防腐ノ偉効アルヲ發
明セリ蓋シ撒里矢兒酸ハ防腐ノ効石炭酸ノ如
ク峻烈ナラズト云フ人アレモ不佳ノ臭味ナク
亦タ毒害ナキ故ニ價ニ石炭酸ニ優レルモノト
ス

ライプシフ府産科病院ニ於テハ千八百七十四
年七月ヨリ以來「タルセルピユルペラリア」産婦
潰瘍
等ニ陰腫子宮ノ注入劑并ニ外布劑ニハ石炭酸
ヲ發シテ此撒里矢兒酸ヲ用フ其方撒里矢兒酸
一分水三百分ノ溶液或ハ撒里矢兒酸一分澱粉

五分ノ混和末ヲ良トス此溶液散劑ヲ用ヒテ奏
効セシヲ屢ナリ

此酸人體ニ入テ害アリヤ否ヲ確認セントシテ
博士コルベ氏ハ一患者ニ一日半瓦蘭ヲ溶劑

分ヲ水十分トシ數日連用セシニ毫モ障礙ヲ
ニ溶解ス

見ズ其後八日間休服シ復タ一日一瓦蘭ツ、火

酒ニ溶シテ二日間用ヒタリシニ消食機ニ變常

ヲ起スヲナク亦々尿中ニ撒里矢兒酸ノ痕迹ヲ

モ見ルヲナク且患者少シモ不快ヲ覺フルヲナ

シ

同氏又ヒ其徒弟八名此經驗ヲ再試セントシテ
各第一日ニ撒里矢涅酸一瓦蘭第二日ニ一瓦蘭
半ヲ服用親試セシニ些少モ體中ニ障碍アルヲ
見ズ

此酸ヲ磨蕐粉或ハ含漱劑ニ伍用レテ効アリ
ライプシフ府ノ博士ウンデルリフ氏ハ此酸ヲ
内服劑トナスニ左方ヲ伍用ス

撒里矢涅酸 一瓦蘭
甘扁桃油 二十瓦蘭

アラビヤゴム 十瓦蘭
甘扁桃舍利別 廿五瓦蘭

橙皮水 四十五瓦蘭

コルベ氏ハ撒里矢涅酸ノ浴法ヲ試驗セシニ僅
少皮膚ヨリ吸收スルヲ認メタリ

同氏ノ説ニ此酸ハ飲水ヲ貯保スルニ良効アリ
試ニ甲乙二個ノ水桶ニ河水ヲ貯ヘ甲桶ノ水ニ
ハ此酸一萬分ノ一ヲ加ヘ乙桶ノ水ニハ何モ加
ヘスレテ共ニ温室中ニ貯メルヲ四週ノ後ニ桶
ノ水ヲ檢スルニ甲桶ノ水ハ毫モ變敗セズ乙桶
ノ水ハ變敗シテ飲料ニ供スル能ハス蓋シ此試
驗ヲ擴充シテ貯水法ニ用ヒバ其裨益大ナラン
ト

外科說約

卷之十九

石黑正賴片

外科說約卷之十九 終

外科說約卷之十八十九圖式

第百八十四圖

大腿後面ト腓腸ノ癒着ヲ截離シテ絆創膏ヲ貼シ
牽引スル式



外科諸病 卷之廿一

第百八十五圖

口ノ瘻閉ヲ截
開スル式



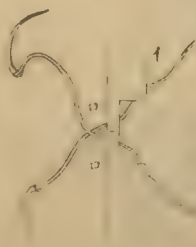
第百八十六圖

同上其二



第百八十七圖

同上ヘルポウ氏ノ續合ニハ
皮膚外面ニハ粘膜



第百九十圖

尋常包莖ノ截開ス可キ
位置ヲ点線ニ示ス



第百八十八圖

包莖ヲ剪刀ニテ截開
スル式①ハ淫消息子



第百八十九圖

剪刀ニテ包皮ヲ三角形ニ剪
去スル
式



第百九十一圖

包莖ヲ截開
露裸スルヲ示
龜頭ヲ



第百九十二圖

溝孔挿子ヲ用ヒテ包莖ヲ截開

スル式(イ)ハ尋常挿子(ロ)ハ溝孔挿

子(ハ)ハ刀(ニ)ハ縫

合線

第百九十三圖

創線ヲ縫接スル式

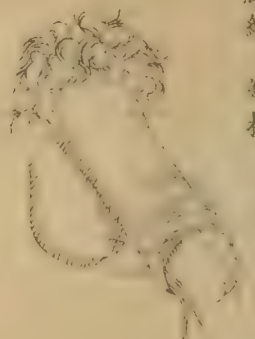
第百九十四圖

箱頭包莖



第百九十五圖

箱頭包莖ノ復スル式



第百九十

六圖

百頭包莖ノ
截開スル式



第百九十八圖

複兔唇



第百九十七圖

單兔唇



第百九十九圖

單兔唇ヲ
縫接セシ
ヲ示ス



外科集
卷之八
圖式
三
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

第二百圖

複兎唇ヲ縫接セ

シヲ示ス



第二百一圖

マルガイカ予成ノ法ニ從テ

兎唇ノ截ハ可キ位置ヲ

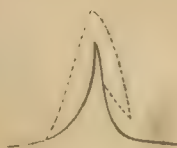
点線ニテ示ス



第二百二圖

ミラルト氏ノ

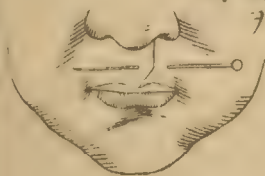
截法



第二百三圖

同上針ヲ

貫ク式



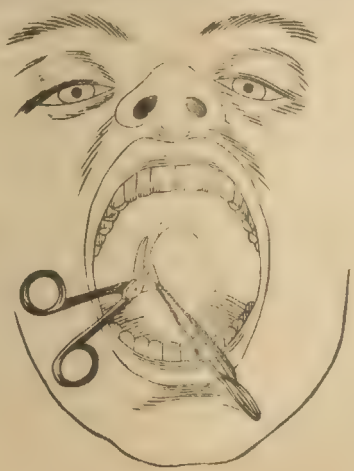
第二百四圖

通常ノ截法



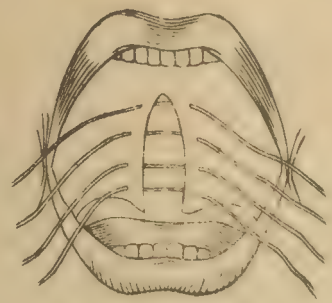
第二百五圖

口蓋破裂 咽喉ヲ剪去
 シノ創縁ヲ作ル式
 点線ハ剪去ス可キ所ヲ示ス



第二百六圖

口蓋破裂ヲ縫合
 スル式



第二百七圖

己ニ縫合絲ヲ結紮スル
 モノヲ示ス ①ハ縫際ノ
 両側ニ截スヲ行フモノヲ
 示ス



第二百九圖

グロス氏ノ柑
 針子ニ針ヲ装
 置スル式

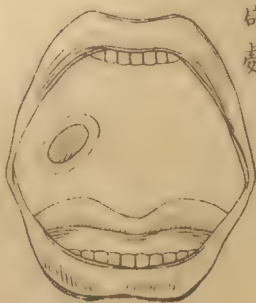
第二百八圖

彎小針



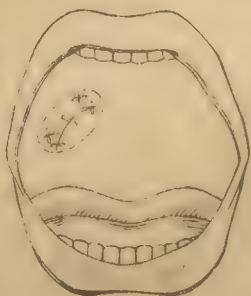
第二百十圖

硬口蓋句處
缺損



第二百十一圖

同上縫
合式



第二百十二圖

頸椎破裂



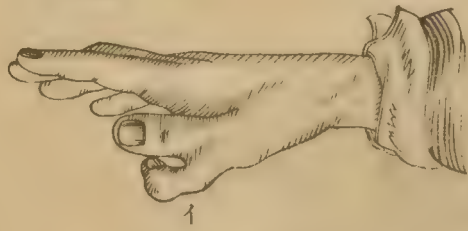
第二百十三圖

腰椎破裂



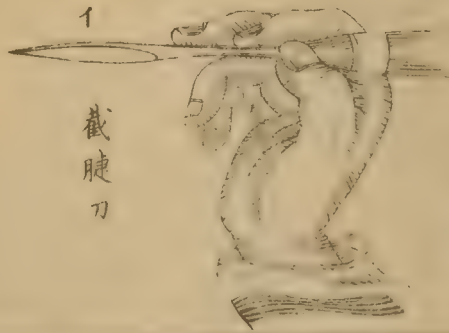
第二百十四圖

駢拇



第二百十五圖

截腓刀



第二百十六圖

胸鎖乳頭筋截離術ヲ行フ式



第二百十七圖

膝節内屈



第二百十八圖

馬足 ①ハカヲ刺ス可キ

處ヲ小ス



第二百十九圖

跟足



第二百二十圖

內翻足



第二百二十一圖

外翻足



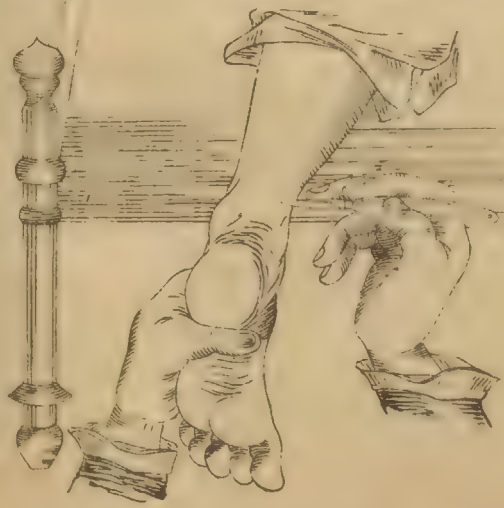
第二百二十二圖

扁足



第二百二十三圖

アレレス氏腓ヲ截離スルニ介者ヲ要セサル式



第二百二十四圖

アレレス氏腓ヲ

截離スル

式

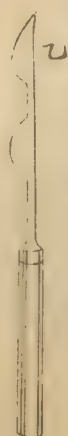


第二百二十五圖



第二百二十九圖

左上白齒ニ用フル鉗子



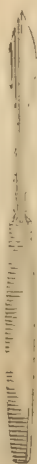
第二百二十六圖



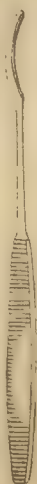
第二百二十七圖

第二百三十圖

右上白齒ニ用フル鉗子



第二百二十八圖



第二百三十一圖

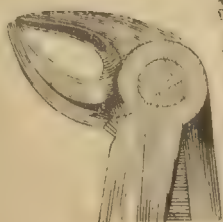
左右下臼齒ニ用フル鉗子



第二百三十二圖

上大齒齦ニ用フル

鉗子



第二百三十三圖

下大齒齦ニ用フル鉗子



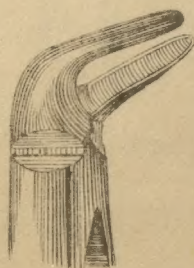
第二百三十四圖

上齶折齒根ヲ拔ル鉗子



第二百三十五圖

下齧折齒根ヲ拔ク鉗子



第二百三十

七圖

上齒ヲ拊拔
スル式



第二百三十六圖

齒鍵并ニ用フル式

①ハ齒鍵

②ハ齒



第二百三十八圖

下齒ヲ鉗拔スル式



第二百三十九圖

リレヤルドソン氏ノ

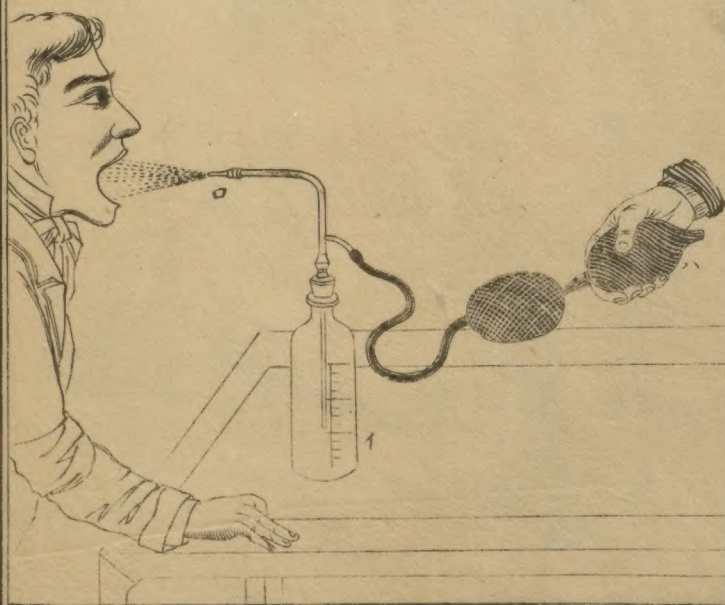
藥液細分器ニテ

吸入法ヲ行フ式

①ハ硝壘子

②ハ嘴口

③ハゴム球



4092316

vi 19

